盛夏・三重町の文化戦探訪の記

◇前号でお知らせの通り、マイクロバスによる三重町の文化戦めぐりと、稲積鐘乳洞の見学会、七月二十三日(日曜)雨をついで決行した。当初二十五名の定員で募集したが、やっと十八名。コース、文化戦の選定、その案内、解説は三重町では最高の方。感謝であった。

◇しかつめらしい探訪記ではどうかと思うので、ちと突飛、奇抜な感想をそえて思い出をたのしみたい。

① 市辺田八幡が最初の見学場所であったが、土砂降りである。明応(一四九二)建武(一三三四)の頃佐伯氏の先祖たちが復興・再興したと伝えられる、丈六の阿弥陀仏は須弥壇遠くほのぐらく、かすかに拝するばかり。傘からは滝のようなしずくで、境内もすぐ横に並んでいる石造古塔も、見ないままでバスにかえる。お詫しをそう。次は、

② 西南戦役戦没者慰霊碑　幸い雨は小降り、つつじの株が斜面一ぱい、公園化されているので、花時の美観が思われる。その傾斜面の中央に、三重の町並みを眼の前に、遠くはるかに雨雲の彼方に三国峠の連山を望見する位置に、自然石の巨大な碑が建っている。当時の市場(三重村、町制は明治三十五年)は、官軍西軍が死闘をもって争奪した激戦。されば昨年六月、三重町と三重史談会は、百年の後霊を弔うこの碑を建てた。郷土史に一行を書き加えたことになる。私達の思いは(雨は小降りになったので)帰りは三国峠へとぶ。

③ 御手洗神社前の老大ギ　上田原の氏神社参道の横にある。大ギの佐伯五木(果指定の外に床木、黒沢)が大きいと思っていたが、ここの大ギを見ると佐伯五木の曾祖父さんのようである。比べればまるで話にならんほどの老大樹、根元から幾つにもわかれ、一樹よく社をなしている。佐伯五木はまるで中学生位。次は、

④ 天文五年(一五三六)の石幢、均斉のとれた美しい姿、同じ上田原への道のすぐ上にある。地蔵六体、大王二体の地蔵塔である。三重にはこんなのが十数基もあるというから、全く驚きである。次は百枝小学校のすぐ近く、観音堂の境内の、

⑤ 法泉庵の宝篋印塔、これはまた素晴しく立派な印塔、まず彫刻が美しく精緻で県の重要文化戦。但許深田の日吉塔よりもはるかに整った塔、背に相輪・火焔が美しい。銘文もきれい。正平二十五年(一三七〇)の造立。町石造物の年表によると宝篋印塔二十二基、宝塔六基があるようで、まるで石造文化戦の町である。幸い雨は全くあがったので、バスの旅も楽しく

⑥ 稲積山鐘乳洞、まず入口附近の大資本を投じての観光施設に驚嘆した。駐車場・食堂・売店等々入洞して更にビックリ、水没の鐘乳洞、縦横に通路排水口さうがち、神秘な水中の景観を明るく照し出して見せてくれた。私の鐘乳洞の概念は大きくかわった。風連の小半や、秋芳洞・龍河洞にない景観で圧倒された思い。出て、上野・河野両氏の斡旋と歓迎下さる昼食・おもてなしを頂く。

⑦ 午後は、まず内山観音参拝、境内数々の文化戦や伝承のものを見て、バスは三国峠へ、歌碑や記念碑を見て、峠での展望をほしいままに。そして殆んどがはじめてのコース、極楽渓谷を下り、番匠川の源流地帯を見たかと、昭和十八年大水害の痕跡を医した、治山・治水の状況を窓外に見ながら、因尾・中野と下り、午後五時半佐伯に帰着した。